

2015 年度 東北大学 前期 国語

一 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	30分	鶴岡真弓『装飾する魂 日本の文様芸術』からの出題。鶴岡真弓は日本の美術文明史家・ケルト芸術文化およびユーロ・アジア装飾デザイン交流史研究者である。多摩美術大学芸術学部芸術学科教授。処女作『ケルト／装飾的思考』で、日本におけるケルト芸術文化理解の火付け役となった。	本文は蝶を題材とした芸術論で、最終段落を除けば特に難解なところもなく、文章自体は読みやすかったのではないだろうか。大半の設問において解答の方向性が指示されており、作問者の意図に沿った丁寧な解答作りを心がけた問題であった。 問(一)の漢字は標準的な難易度で、特に(1)～(3)は落としたくない問題である。問(二)は字数制限が厳しい東北大学らしい問題で、傍線部から大きく離れた位置にある解答すべき内容を、傍線部の表現を手がかりに見つけ、少ない字数で簡潔にまとめる必要があった。問(三)は傍線部から解答に必要な要素を予想し、それぞれの要素に該当する文中の箇所を

傾向と対策

要約するだけで解答できる比較的やさしい問題であり、手早く済ませたい。語彙が豊富であるほど要約は容易になるので、幅広い分野の知識を身につけておきたいものである。問(四)は問題の指示が大きなヒントになっており、これを頭において解答を書き始めれば、難なく突破できたのではないだろうか。問(五)では注記されている内容が傍線部を理解するうえで重要になるので、問題文を読み始める前に注目を通しておくこと、速やかに文意を理解できたのではないだろうか。現代文を解く際は、前もって注を読むようにしておこう。

解答

- 問(一) (1) 軽快 (2) 紛 (3) 脅 (4) 洞窟 (5) 残酷(惨酷・残刻も可)
- 問(二) 美しい翅の文様を子孫へ継承し不変のままに表すさま。(25字)
- 問(三) 敵の様子に応じ、翅の裏地の地味な色彩による擬態と表の鮮烈な色彩による威嚇を切り替えること。(45字)
- 問(四) 蝶が翅の色彩と文様を自衛のために活用するほど、人間は蝶の翅に収集の対象としての魅力を感じ、蝶を危険にさらしてしまう状況。(60字)
- 問(五) 蝶が生命を繋ぐ美しい翅を子孫代々継承し、何度でも完成された美を表すのに対し、美を求める欲望に従う人間は、時に失敗し不完全な美を表してしまうから。(72字)

本文解説

段落解説

I 蝶という生物(第1・第2段落)

蝶はまだ陸地がひとつであった中生代に出現し、中生代末期、巨体を維持できなくなった恐龍が絶滅していく一方で一気に繁殖力を増し、花を求めて軽快に飛び回っていた。妖精のような蝶ははかなげに思えるが、実は地球上の種の多くを占める多様性と、一億五千万年の歴史をもつ、たくましい生物なのである。

II 神から授かりし二対の翅(第3・第4段落)

生物としては被食者の立場にある蝶が、これほどまでに繁栄することができたことには、天敵の眼をくらませる斑紋が精巧に描かれた二対の翅の存在が大きい。しかし、「人間という新しい天敵」に対してだけは別である。

直線的な飛行しかできない天敵に対して、曲線的な飛行を可能とする蝶が最も無防備な状況に陥るのは、草花にとまっているときである。そんなときこそ、翅の色と斑紋がものをいった。ルリタテハの翅の裏地の地味な色彩は、樹皮に擬態することで天敵の眼を逃れるためにある。それでも見つかってしまったときには、今度は翅の表の鮮やかな色彩によって天敵を威嚇する。このような翅の裏表の色彩を用いた擬態と威嚇の使い分けにより、蝶は自衛を可能にしている。ほかに、小鳥の天敵である蛇の眼を模した「眼状紋」や、大事な頭部を守る「擬似頭」など、蝶の翅はさまざまな意匠をもつ。

III 美の形象としての蝶の翅(第5〜第7段落)

しかし、人間にだけは翅の色彩と文様による眼くらしが通用しなかった。それどころか、人間はこの蝶の翅に美を見出し、蝶を収集するようになった。

自衛のための蝶の翅の色彩と文様が、かえって人間に追われる原因になってしまったのである。

人間は蝶を標本にして展示するだけでなく、その色彩や文様を模倣し、身の回りのものに写し取ったりもした。こうして、食べることを目的とした「捕食者」ならぬ、装飾を目的とした人間という「捕飾者」によって多くの蝶が捕らえられた。

ロジェ・カイヨワは、人間が絵を描くことと、蝶がその翅に文様を反復することは、どちらも美しい形象をつくり出そうとする自然の「傾向」の両極であるとしたうえで、蝶の技の方が「不変の完成品」をつくり得ると唱えた。

蝶は、生命維持を可能とする美しい文様をその翅に描き、子孫へと継承していくことで、翅の文様という芸術を不変に保つ。一方で人間は、美しいものを求める心から芸術を生み出そうとするが、時に失敗してしまうものである。つまり、生命の機能として生み出された形象である蝶の翅の方が、完成された芸術であるといえるのである。ここから、蝶と比べて人間は美を生み出すことに不得手であるという結論が導かれる。このように、通常は劣ったものだという扱いを受ける蝶のようなものが、実は高度な秩序を備えており、人間の本質はこれに劣るものであるとして批判的に捉えるというのが、カイヨワ独特の『「対角線」の人間批判』である。そして、芸術家としての劣等感にもとづく蝶への嫉妬が、蝶を捕らえたいという人間の気持ちの背後にあるのではないかと筆者は考えている。また、この嫉妬が蝶の芸術を超えるという目標を生み、人間の芸術活動の原動力にもなっているものと考えられる。

百字要言

天敵からの自衛の機能をもつ多種多様な蝶の翅の文様と色彩は、蝶の繁栄を支えてきた。不変の完成された美を表す蝶に対し、本質的に不器用な画家

である人間は嫉妬からこれを捕らえ、蝶の芸術に比肩する美を創造した。

(100字)

用語解説

―出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店) (ただし、※のついた語義は解説執筆者による)

表象 ※象徴。直接知覚できない抽象的な事物や観念を、何らかの類似性を

もとに具象化したもの。

狡猾 ※するく、わるがしこいこと。また、そのさま。

炯眼 ①きらきらと光る眼。鋭い眼つき。

②眼力の鋭いこと。洞察力のすぐれていること。慧眼。

形象 ①表にあらわれた形。すがた。

②人間によって知覚された事物の像、また観念などの具象化された像。

設問解説

問(一)

解答 (1) 軽快 (2) 紛 (3) 脅 (4) 洞窟 (5) 残酷(惨酷・残刻も可)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

標準的な難易度であるが、(4)と(5)が少し難しかった。特に「洞窟」の「窟」

の字は日常的に書く機会が少なく、思い出せずにうなった人も多いのではないだろうか。「クツ」の音から「屈」という漢字を頭に浮かべ、「穴」にかかわる漢字(「穿」・「窯」など)につく「あなかんむり」と組み合わせることができれば、「窟」の字にたどり着くことができる。度忘れしてしまったと

きは、漢字の音読みと部首を意識してみるのも一手である。

問(二)

解答 美しい翅の文様を子孫へ継承し不変のままに表すさま。(25字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅲ(第5～7段落、特に第7段落)

解説

傍線部は第3段落の最終文であり、この後に続く部分で「人間」について言及されることをほのめかす一文であるが、「人間」はしばらくの間登場しない。読み進めていくと、第5段落にて「二本足の動物」という形で婉曲的に人間が登場し、これ以降は人間と蝶のかかわりについて記述されている。したがって、解答すべき内容は意味段落(Ⅲ)にあるとわかる。傍線部から離れた位置にあることに注意したい。

「人間という新しい天敵の嫉妬」という表現を頭において読み進めていくと、第7段落5文目に「蝶を捕えたいという人間の欲望の裡には、蝶の翅の完璧な芸術への、抑えがたいジェラシーが潜んでいる」とあり、これが「人間という新しい天敵の嫉妬」を説明していることに気づく。つまり人間が嫉妬の対象としたのは、「蝶の翅の完璧な芸術」なのである。問題には、「人間が嫉妬の対象としたのは蝶のどのようなあり方か」と問われているので、「蝶の翅の完璧な芸術」というのが「蝶のどのようなあり方」を示しているのかを考える。すると、第7段落2文目の「人間よりも、子々孫々誤ため文様を翅に発現させる蝶の技の方が『不変の完成品』をつくり得る」という人間と蝶のあり方を比較した記述から、蝶が「子々孫々誤ため文様を翅に発現させる」ことが人間の嫉妬の対象となる「蝶の翅の完璧な芸術」の意味するところと

あるとわかる。あとは、「子々孫々誤ため文様を翅に発現させる」というのを、わかりやすく自分の言葉で表現すれば解答となる。

「子々孫々誤ため文様を翅に発現させる蝶の技」が『不変の完成品』をつくり得る」ということを踏まえると、「誤ため文様」というのは、常に翅の文様が「不変」であることを意味するとわかる（これが蝶の翅が「完璧な生命の芸術」たるゆえんである）。したがって、「子々孫々誤ため文様を翅に発現させる」という表現は、「美しい翅の文様を子孫へ継承し不変のままに表す」と言い換えられ、これがほぼ解答となる。あとは、蝶の「あり方」を問われているので、文末を「あり方」「さま」「姿」などとすれば解答は完成である。

《解答要素》

- ① 「美しい翅の文様を子孫へ継承する」
- ② 「不変のままに表す」

※文末は「あり方」「さま」「姿」などと締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第7段落2文目
- ② 第7段落2・5文目

問(三)

解答 敵の様子に応じ、翅の裏地の地味な色彩による擬態と表の鮮烈な色彩による威嚇を切り替えること。(45字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型・具体化型

解答範囲 II (第3・第4段落、特に第4段落)

解説

傍線は『隠蔽』と『顕示』の使い分け」という部分に引かれているので、「隠蔽」と『顕示』にあたるものをそれぞれ具体的に説明し、その「使い分け」というのが何を意味するのか書けば解答になりそうである。

傍線部を含む一文を見ると「翅」について述べられており、傍線部は第4段落の傍線部までの部分において語られた蝶の「翅」についての話題を受けていることがわかる。また、傍線部の次の文が「それに」という前の事柄に説明を追加することを意味する添加の接続詞で始まっているので、傍線部以降の部分は直接的に傍線部の内容を説明したものではないと予想される。したがって、第4段落の冒頭から傍線部までの部分に注目すればよいとわかる。「隠蔽」と『顕示』という対比構造も意識しておくことよさそうだ。

「隠蔽」と『顕示』の具体的な説明にあたる部分を探すと、これは傍線部の前文の内容を受けていることがわかる。「隠蔽」と『顕示』という対比を踏まえると、傍線部の前文では「逆に」という言葉を境に「隠蔽」と『顕示』が説明されていると推測できる。内容と順序から考えて、「逆に」の前の「ルリタテハが」地味な色彩を裏地に用意しているのは、小鳥に追いつめられたとき、さつと樹にとまり樹皮の色に紛れるためであり」という部分が「隠蔽」にあたり、「逆に」の後の「パッと鮮やかな表を出して敵を仰天させるためであった」という部分が「顕示」にあたる。あとは、これを対比の構造を維持しつつ、それぞれ簡潔な表現にまとめればよい。

「地味な色彩を裏地に用意しているのは、小鳥に追いつめられたとき、さつと樹にとまり樹皮の色に紛れる」というのは、「翅の裏地の地味な色彩」を用いた「擬態」である。そして、「パッと鮮やかな表を出して敵を仰天させるためであった」というのは、「翅の裏地の地味な色彩」に対して、今度は「翅の表の鮮烈な色彩」を用いた天敵への「威嚇」である。「擬態」と「威嚇」と

いう翅の「機能」の簡潔な言い換えの表現が思いつかなくても、「地味な裏」と「鮮やかな表」という翅の形態の対比を記述できていれば、「隠蔽」と「顕示」の説明としては及第点である。

次に「使い分け」についてだが、傍線部を含む一文をみればこれが「自衛」のための手段であるとわかる。何からの「自衛」かというところ、もちろん小鳥などの「天敵」である。そして、傍線部前文の「それでも見つかったしまったときは」という言葉からわかるように、「隠蔽」と「顕示」は「天敵」に対する臨機応変な二重の自衛策なのである。つまり「使い分け」というのは、敵の様子に応じて二つの戦術を切り替えることであるといえる。

以上をまとめると解答は、「敵の様子に応じて、翅の裏地の地味な色彩による擬態と表の鮮烈な色彩による威嚇を切り替えること」となる。

《解答要素》

- ① 「翅の裏地の地味な色彩による擬態」
- ② 「翅の表の鮮烈な色彩による威嚇」
- ③ 「敵の様子に応じて①と②を切り替える」

《参照箇所》

- ① 第4段落3文目
- ② 第4段落3文目
- ③ 第4段落3・4文目

問四

解答 蝶が翅の色彩と文様を自衛のために活用するほど、人間は蝶の翅に収

集の対象としての魅力を感じ、蝶を危険にさらしてしまう状況。

(60字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 II・III(第3～第7段落)

解説

問題の指示に従い、まずは「蝶の翅が持つ機能」について考えてみる。意味段落へⅡにおいて、**蝶の翅は、その「色彩と文様」により「自衛する」機能をもっている**ことが語られた。これを踏まえると、傍線部の「相手の眼をくまらせよう」といろいろに行動すればするほど」というのは、蝶が翅の機能を活用して天敵の眼を「まかさう」としていることを意味しているとわかる。

次に、「その二本脚の動物(Ⅱ人間)」が、「ますます嬉々として」「彼ら(Ⅱ蝶)」を追うのはなぜか考えてみると、第5段落最後の二文から、人間が蝶を追うのは「食うため」ではなく「翅の美しさ」を狩るためだとわかる。また、「ますます嬉々として」蝶を追うようになるということは、**蝶の行動は収集の対象としての魅力を高めている**ことを意味する。つまり、身を守る手段であるはずの蝶の翅の色彩と文様が、これを活用すればするほどその美しさから人間を惹きつけ、蝶が命を脅かされる原因になってしまっているのである。この**身を守る手段が、かえって自らを危険にさらすという逆接の関係**が、傍線部の一文が表している状況として、最も重要な部分である。

以上をまとめると解答は、「蝶が翅の色彩と文様を自衛のために活用するほど、人間は蝶の翅に収集の対象としての魅力を感じ、蝶を危険にさらしてしまう状況。」となる。

《解答要素》

- ① 「翅の色彩と文様による自衛」

- ② 「蝶が活用するほど」
 ③ 「人間は蝶の翅に収集の対象として魅力を感じる」
 ④ 「①・②が」蝶を危険にさらしてしまう状況」

《参照箇所》

- ① 第4段落3・4文目
 ② 第4段落3～7文目
 ③ 第5段落7文目
 ④ 第5段落4文目

問(五)

解答

蝶が生命を繋ぐ美しい翅を子孫代々継承し、何度でも完成された美を表すのに対し、美を求める欲望に従う人間は、時に失敗し不完全な美を表してしまうから。(72字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 本文全体

解説

傍線部の「躓き易い」「不器用な」といった表現からは、人間に対して批判的な評価をしていることが読み取れる。直前の一文における『対角線』の人間批判」が、「人間の本質を批判的に捉える」ものであることから、傍線部はこれを受けたものであるとわかる。つまり傍線部は、筆者がカイヨワの『対角線』の人間批判」を受けて人間を形容したものであり、その表現を用いた理由を答えよという問いに答えるには、まずは本文における『対角線』の人間批判」について考えればよいことになる。

注によると『対角線』の人間批判」とは、「通常は比較されない事物の対

比や、通常は劣ったものとされる非合理なもの、空想的なものがひそかに備える高度な秩序の指摘を通して、人間の本質を批判的に捉えること。」であるという。第7段落3文目の「これ」という指示語が、その前文の『悪しき絵画』をつくり出してしまふ人間よりも、子々孫々誤ため文様を翅に発現させる蝶の技の方が『不変の完成品』をつくり得る」という部分を指していることから、この場合に指摘されている「通常は劣ったものとされる非合理なもの、空想的なものがひそかに備える高度な秩序」というのは、蝶のつくり出す「不変の完成品」のことであると考えられる。「不変」かつ「完璧」な「蝶の翅の鱗片がつくり出す文様」に対して、人間が生み出す「悪しき絵画」というのは、不完全な形象である。また、蝶の翅の「不変」性が「子々孫々誤ため文様を翅に発現させる」ことによるのに対し、人間は時に失敗し、「悪しき絵画」を生み出してしまふのである。したがって、蝶が美しい翅を子孫代々継承し、何度でも完成された美を表すのに対し、人間は時に失敗し不完全な美を表してしまうということが、「躓き易い不器用な画家」という筆者の表現の意図するところであると考えられる。

また、問題の指示に「蝶と人間を対比させながら」とあるので、もう少し本文における蝶と人間の「芸術」にまつわる対比構造について考えてみる。蝶の翅と人間が対比される意味段落Ⅲに注目し、蝶の翅とその文様についての表現を探すと、

第5段落1文目「文字どおり命の表象」

第7段落4文目「完璧な生命の芸術」

というように、「生命」「命」といった修飾がなされている。これは、意味段落Ⅰ～Ⅱにおいて語られたように、蝶の翅が自然の中で形作られた、「大自然のなかで自由に子孫を繁栄させ続ける」ことを可能にするものであるからだ(第3段落4文目)。その背景には、「他の生物の命を殺して食べて、

己の生命を維持していくのが動物の業」であることがある(第3段落1文目)。

しかし、この業とは関係がなく、「他の生物の命」を殺す存在が人間である。

第5段落5・6文目にあるように、「食うため」ではなく、蝶の「翅の美しさを狩りに来る」のである。つまり、「自然の掟」の中で育まれた蝶の翅という芸術を、美しいものを求める欲望に従って狩るのが人間なのである。人間が生み出す芸術についても同様で、蝶が「子孫を繁栄させる」ことの助けとして「完璧な生命の芸術」を獲得したのに対し、人間の芸術は「生命」とは関係なく、純粹に美を追求する心から創造されたものであるといえる。つまり、美しい形象をつくり出す点において「自然の同じひとつの『傾向』」であっても、**蝶のそれは生命を繋ぐものであり、人間のそれは美を求める欲望に従うものである**ということである。

以上をまとめると解答は、「蝶が生命を繋ぐ美しい翅を子孫代々継承し、何度でも完成された美を表すのに対し、美を求める欲望に従う人間は、時に失敗し不完全な美を表してしまうから。」となる。

《解答要素》

- ① 「蝶は美しい翅を子孫代々継承し、何度でも完成された美を表す」
 - ② 「人間は時に失敗し不完全な美を表してしまう」
 - ③ 「(①は) 生命を繋ぐもの」
 - ④ 「(②は) 美を求める欲望に従うもの」
- ※「①・③」に対し、「②・④」など、対比の関係を明確に記述すること。

《参照箇所》

- ① 第7段落2文目
- ② 第7段落2文目
- ③ 第3段落4文目

④ 第5段落6文目

(正木僚、伊藤麻祐、後藤尚文)

2015 年度 東北大学 前期 国語

二 小説

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	25分	開高健『見た・揺れた・笑われた』に収録された短編「揺れた」からの出題。開高健は日本の小説家で、1957年に『裸の王様』で第38回芥川賞を受賞している。	1960年代に発表された作品であり、使用されている言葉自体はほぼ現代語と変わらないものの、ところどころ聞きなじみの薄い表現が混ざっていることで読みにくさを感じた人もいたかもしれない。内容的にはリード文にある通り、「小説家」と「著者」との二人の対話に終始するため、登場人物どうしの関係性を読み解く作業はほぼ必要ない。しかし一方で、言葉足らずな会話文と合間に挿入される決して長いとはいえない地の文とから人物の意図や心情を読み解く必要がある、限られた時間の中ではこれが非常に難しい。まずは書くべきことの大枠を定めやすく比較的難易度の低い(一)(四)を処理した上で、(三)(五)のポイントをどれだけおさえられるかという勝負になるだろう。難しい問題に直面したとき、何も書かないのは損であるが、時間制限が厳

傾向と対策

試験においては大量の時間を割くのもまた損となることが考えられるため、短い時間で割り切って最低限の解答を作成するという柔軟性もときには必要になる。

解答

問(一) 小説家が真意を解さずにお世辞を言ったと捉えたから。(25字)

問(二) 全頁が空白の本をつくること。(14字)

問(三) 革新的な創造の困難を認識し、読者の想像力を完全に解放した状態を表現することだけを望む考え。(45字)

問(四) 制約のない中で想像力が自由にわきたつことを痛快に感じる気持。(30字)

問(五) 謙虚で穏やかな表情をしながら、一切臆せず小説家たちを正面から痛烈に批判する著者に、誰を目の前にしても自らの信念を譲らず、本気で挑む気迫を感じたから。(75字)

本文解説

百字要旨

「小説家」は『最後の書』の出版記念会でその本の「著者」と出会う。「小説家」は本の制作意図を聞く中で、謙虚な態度で過激なことを言う「著者」の、表現へのこだわりと常に本気で話すことへの強い信念とを感じた。

(100字)

用語解説

―出典：『広辞苑 第六版』（岩波書店）

半可通 通人ぶること。よく知らないのに知っているように振る舞うこと。

また、そういう人。

おめず臆せず すこしも気おくれしないで。

とりつくしまがない たよりとしてすぎる手がかりもない。また、つつけん

どんであいてをかえりみる態度が見られない。

設問解説**問(一)**

解答 小説家が真意を解さずにお世辞を言ったと捉えたから。(25字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 一般化型

解答範囲 第5段落

解説

小説家の「いい本ができましたね」という発言を、著者が「打ってかえずようにつっぱねた」理由を問う設問だ。理由について明示的に述べられている箇所は本文にないので、状況から妥当であると考えられることを書く必要がある。

まずは傍線部直後から始まる著者の一連の発言に注目しよう。ここで著者は、問われてもいないのに『最後の書』がどのような意図で作られたかを説明している。なぜこのようなことをしているのか、おそらく直前の小説家の発言「いい本ができましたね」が気に入らなかったのだと考えられる。「いい本ができましたね」は著者の本に対する理解を表明する発言であるが、著

者は小説家の理解を不十分であると見なしたために正しい理解について説明しだした、と考えることは自然である。事実、第5段落1文目に小説家の視点で「いい本ができましたね」が「あたらずさわらずのお世辞」であることが述べられている。

以上の内容、つまり、小説家の発言が真意を解さないお世辞であると見なしたという内容を字数制限に合うようにまとめると、次のようになるので、これを解答とする。「小説家が真意を解さずにお世辞を言ったと捉えたから。(25字)」

《解答要素》

- ① 著者が小説家の発言をお世辞であると捉えたことが示されていること。
- ② 著者が、小説家が著者の真意を解していないと思った、ということが示されていること。

《参照箇所》

- ① 第4段落、第5段落1～10文目
- ② 第4段落、第5段落1～10文目

問(二)

解答 全頁が空白の本をつくること。(14字)

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 指示語説明型

解答範囲 リード文、第5段落

解説

傍線部を含む一文の指示語をひもといていこう。最初の「それには」は、直前の『読者の想像力が高められる』を達成するには、「といった内容を指

示しており、「こうする」ことで「読者の想像力が高められる」ことがわかる。そして、直後の「それで、あの本をつくったんです」から、「こうする」ことは「あの本をつくる」と等しいことがわかる。「あの本」とは、『最後の書』のことであるから、解答は、『最後の書』が持つ「読者の想像力を高める」ための特徴を簡潔に表現し、それをつくること、という形にまとめるべきだろう。『最後の書』の特徴としては、第5段落8文目に「字も線も日附の数字も、なんにもありませんからね、思う存分好きなことを書いて汚してくださいだったらいいんです。」とあることから、頁が全部空白であることに言及すればよいだろう。本文だけでなく、リード文の要素も活用して、以下を解答とする。「全頁が空白の本をつくること。(14字)」

《解答要素》

- ① 『最後の書』の特徴として、頁が全部空白であることにふれていること。
② ①のような本をつくること、というように形にまとめていること。

《参照箇所》

- ① リード文
② 第5段落9文目

問(三)

解答 革新的な創造の困難を認識し、読者の想像力を完全に解放した状態を表現することだけを望む考え。(45字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 一般化型

解答範囲 第6段落

解説

傍線部に表れている著者の考えを説明する問題であるが、事実上、傍線部を含む発言全体から読み取る必要がある。傍線部の前提となるのが、傍線部直前の「……私はね、創造者じゃないんです。表現者ですよ。ある状態を表現してみたかったです。」であり、ここから、著者は小説を創造することよりも、「ある状態」を表現することに重きをおいていることがわかる。そして、傍線部直後の「小説を書いてどうしようということじゃないんだ。本はもう十分すぎるほど十分書かれましたからね」は、傍線部の意図を補足する役割があるが、ここではまたも、小説を書くことへのこだわりをなさを表明している。さて、傍線部自体は「今日のこの会が済んだらささと消えてなくなります。」であるが、この部分の意図を読み取ろう。まず、「今日のこの会」は何であっただろうか。これまでの部分から、著者が新人作家で、「今日のこの会」が『最後の書』の出版記念会であることは読み取れる。本の出版記念会は、新人作家の作家としての今後につながる場であるはずだが、著者は、会が終わる次第消えてなくなるつもりであると宣言している。これは傍線部の前後で表明されたのと同様に、小説を書くことへのこだわりのなさを示していると考えられる。そして、その背景にあるのが、傍線部前から読み取れる、「ある状態」を表現することへの執着である。この「ある状態」とは何であろうか。それは、著者が『最後の書』をつくった目的であり、第5段落9文目から読み取れる「読者の想像力を完全にわきたたす」という状態であろう。また、この考えの裏には、著者の小説を書くことで読者の想像力を完全に解放することへのあきらめのような認識がうかがえる。「鍵になるような作品が今の日本にありますか?」「創造者じゃないんです」「本はもう十分すぎるほど十分書かれましたからね」「陽の下に新しいものはなにもない(これは小説家の発言だが直後に著者が同意している)」

といった記述は、著者が小説を書くことで読者の想像力を完全に解放することを困難であると考えていることの表れであろう。著者は読者の表現力が完全にわきたった状態を表現することを望んでおり、その手段としての「小説を書くこと」には見切りをつけて『最後の書』という本をつくるに至ったという内容が、この発言から読み取れる。

以上の内容を字数制限に合うようにまとめると、以下のようになるので、これを解答とする。「革新的な創造の困難を認識し、読者の想像力を完全に解放した状態を表現することだけを望む考え。(45字)」

《解答要素》

- ① 著者は読者の想像力を完全に開放することのみを望んでいるということが述べられていること。
- ② 著者が小説を書くこと(創造)によって①を達成することは困難であると認識しているということが述べられていること。

《参照箇所》

- ① 第5段落9文目、第6段落13・14文目
- ② 第5段落18文目、第6段落16・19文目

問題

解答 制約のない中で想像力が自由にわきたつことを痛快に感じる気持。

(30字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 具体化型

解答範囲 第5・第6段落

解説

傍線が引かれた「そういう気持」の具体的内容を説明する設問である。指示語の指示内容は直前を参照するのが原則であるから、「ここ」では小説家の「……なるほど」を挟む2文、「白紙にはなにを書いていいかわからないから薄気味悪いようだけど、なにを書いてもよいと考えられるから楽しくもあつてしような」にも書かなくてよいと考えることもできますね。」の内容が指示されていると考えるのが自然だろう。傍線部を含む一文から、「そういう気持」を起こさせる本は「しみじみした本」であるとわかり、これはプラスの評価であろうから、「そういう気持」が起きることはどちらかといえばプラスなことだという気持ちで解答を構成すべきである。よって、「薄気味悪いようだけど」の部分はただの譲歩として放置するのが賢明だろう。(字数制限がなければ含めるのも手かもしれないが。)「ここ」では、「痛快」という言葉で「純粋に楽しいただけではない」というニュアンスを表現することとする。

ところで、傍線部を含む一文「そういう気持を起させるようなしみじみした本は近頃あまりないのじゃないんですか。」に対応する文が、傍線部以前に登場していることにも注目したい。それは第5段落の最後「鍵になるような作品がいまの日本にありますか？」である。この「鍵」は直前の小説家の発言から「想像力がうごきます」ための「きっかけ」の比喻であるとわかる。この「想像力がうごきます」は「なにを書いてもよいと考えられる」に対応すると考えてよいだろうから、解答の要素として利用可能である。また、小説家の「想像力がうごきます」という発言は、著者による「読者の想像力を完全に自由にわきたたす」という発言を受けてのものであるから、必要であればここからも要素を拾ってこられる。

以上の要素を字数制限に合うようにまとめると、次のようになるので、こ

れを解答とする。なお、「白紙にはなにを書いてもよいし、書かなくてもよい」という部分は、「白紙」という要素を抽象化し、「制約のない」という形に凝縮した。「制約のない中で想像力が自由にわきたつことを痛快に感じる気持。(30字)「

《解答要素》

- ① 白紙には何を書いてもよく、書かなくてもよいということにふれていること。
- ② ①のような状況下で想像力が自由にうごくことを楽しむ気持、というような形でまとめていること。

《参照箇所》

- ① 第6段落26～28文目
- ② 第5段落9文目

問(五)

解答

謙虚で穏やかな表情をしながら、一切臆せず小説家たちを正面から痛烈に批判する著者に、誰を目の前にしても自らの信念を譲らず、本気で挑む気迫を感じたから。(75字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 第7段落

解説

傍線部の理由を問う設問である。傍線部を含む一文は「徹底的な無化をたくらんでいるらしい相手のかたくな強情さを感じて小説家は感動しつつ、たじろいだ。」であるから、とりあえず「徹底的な無化をたくらんでいるら

しい相手のかたくな強情さを感じて」の部分を理解すべきであろう。まず、この「相手」は著者のことである。「相手」は「徹底的な無化をたくらんでいるらしい」とあるが、これは第7段落で「ニコニコおだやかに笑ってあくまで謙虚だがとりつくしまがない。「なにを言ってもその場でたたき伏せられてしまいそうだ。」と表現されているような著者の様子を受けてのものである。そして、そんな「相手」の「かたくな強情さを感じ」たことで、「小説家は感動しつつたじろいだ」のである。「かたくな強情さ」は直前の「いちいち本気で話そうとしているらしい激しさ」を受けた表現だろう。そしてその「激しさ」は第6段落28～31文目にみられた、世間の小説家への痛烈な批判を受けてのものだ。「世間の小説家」の中には当然、著者が目の前にしている「小説家」も含まれるわけだが、そんなことはお構いなしに正面から批判する姿が、信念を譲らない著者の気迫を表しており、その気迫が小説家を感動させ、たじろがせたのである。

以上の内容を字数制限に合うようにまとめると以下ようになるので、これを解答とする。「謙虚で穏やかな表情をしながら、一切臆せず小説家たちを正面から痛烈に批判する著者に、誰を目の前にしても自らの信念を譲らず、本気で挑む気迫を感じたから。(75字)「

《解答要素》

- ① 著者が謙虚で穏やかな様子であるということにふれていること。
- ② 著者が臆することなく小説家たちを批判したことが述べられていること。
- ③ ①②から著者の信念と、それを譲らない気迫を感じたということが述べられていること。

《参照箇所》

- ① 第7段落6文目
- ② 第6段落30・31文目、第7段落2・3文目
- ③ 第7段落7・9文目

(森慎太郎、高橋粒、昆野祐己)

2015 年度 東北大学 前期 国語

三 古文（狂歌集）

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★☆☆☆	25分	八島定岡『狂歌現在奇人譚』からの出題。江戸後期に完成したもので、連歌や俳諧を中心とした話が収められており、一話ごとにそれぞれ画が添えられている。	例年に比べて本文の分量は多いが、マニアックな単語が含まれているわけでもなく、怪奇じみでいて興味の湧きやすい物語であるため、比較的読みやすいように思える。しかし受験生が苦手とする歌が二つも含まれてその解釈が求められているため、簡単な問題とはいえないだろう。 設問では高度な知識を問うものよりも基礎知識を使って文脈を追う力や思考力が試されている。過去問などを解いたら単語や文法事項を確認するだけでなく、自分が間違えた問題について、どう考えたら正解にたどり着くのか、自分には何が足りなかったのかを考えることを習慣づけられるとよい。また、東北大学は和歌を含む文章をよく出しているので、本番でほかの受験生に差をつけるためにも和歌の対策はしっかりしておくべきである。

《この解説の使い方》

本文読解

「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか（「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分）や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど（「通読」の★部分）について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使い過ぎる人は、この項目を見てみよう。

設問解説

設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説

「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識でつくれる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

解答

問(一) (ア) しばらくして日は暮れた

(イ) 理由もなく寒い感じがした

問(二) 十五夜でなくても今日は月が美しいのに、月見は十五日で満月になる明日がよいと思うあなたは浅はかであり、月夜も趣が少なく感じられる、という意味。

問(三) 明日満月を見ればよいという怠慢な心はなく、さすがしく今夜の美しい月を見えています、という意味。

問(四) 千本が高殿で月を見ながら歌を吟じた声。

問(五) 一緒に月を見ようと約束した俳諧師がやって来なくても、月を賞賛す

る歌を吟詠しながら月見をして、気長に待っていたこと。(57字)

本文読解

前書きの読解

登場人物が狂歌師の千本と俳諧師の二人いて、友人同士である。二人の職業から、本文中に歌が出てきそうだと予想できるとよい。

通読

第1段落第1行～第2行「ある年八月よりおきつ。」

◎「千本とふたり」とは、前書きにあった千本と俳諧師を指している。「千本と俳諧師が二人で」ということ。

◎「ちぎる」は「約束する」の意味の重要古語。

◎本文中「くおく」という表現が多用されているが、大概は「くしておく」と訳せば意味は通じるので深く考えず先へ進む。

★「うてな」の意味を知らなくても、上に登って月を見ることができ、高いやぐらのようなものが想像できればよい。

第1段落第2行「かくて十四まじ消息せうしして、」

◎「消息」は「手紙」。「消息す」と動詞化しているので「手紙を書く」となる。

第1段落第2行～第3行「『今日なんくこせたり。』

◎「なん」は取り除いても文の意味は変わらないので、係助詞で強調の働きをしているとわかる。よってこの「なん」は訳さなくてよい。

◎「おこす」は「よこす・送ってくる」の意味の重要古語。俳諧師は高殿で

月を見ようという約束どおり、月がきれいに見えそうだからと千本を月見に誘う手紙を送ったのだ。

第1段落第3行「とばかりあくは暮れぬ。」

◎「とばかり」は「しばらく」の意。

★傍線が引かれて設問になっているので、詳しくは解説を見てほしい。(問一)

第1段落第3行～第4行「この俳師、くにあらず。」

◎日が暮れても千本がやって来ないので俳諧師は千本を迎えに行ったが、千本は家にいない。俳諧師のもとへも行っていないなら、千本はどこへ行ったしまったのだろう。

第1段落第4行～第5行「人々に問へくを聞きて、」

◎「こそ」は強意の係助詞なので訳さなくてよい。

◎「かは」は反語の係助詞なので、「今宵にかぎることかは」は「今夜にかぎることではない」と訳す。

◎千本の家の人々は十五夜で満月である明日のほうが月見に適していると思っているらしい。

第1段落第5行～第6行「この俳師、くらみなれ』

◎「けん」は「けむ」が音便化したものなので、過去推量の助動詞。ほかにも過去の伝聞や過去の婉曲などの意味があるが、「こ」では過去推量。

★「たがふ」は活用によって意味が異なる。四段活用ときは「背く・逆らう」「食い違ふ」「変わる」の意味がある。下二段活用ときは「相違させ

る・破る」「間違える」「方違へをする」の意味がある。今回は下二段で、文脈と合う訳語を選ぶと、「破る」が当てはまる。

◎俳諧師は千本が一緒に月を見る約束を破り、ほかの用事のために出かけて行ったと思って怒っているのだ。

第1段落第6行～第9行「と言ひつゞきてあり。」

◎「つづりぬ」まで、主語は俳諧師。

◎俳諧師は独り言を言うだけでは気が済まなかったため、千本への恨めしい気持ちを書き歌に託して、千本が帰ったときに必ず目に入るように句を書いた紙を扉に貼ったのだろう。

★傍線については、最初の通読の際は、千本が約束を破ったことに対する俳諧師の恨み言だとわかっていけばよい。詳しくは解説で説明しているので、そちらを見てほしい。(→問二)

第2段落第1行～第2行「かくて、かゝの夜の月」

◎「にかあり」は、類出形である「に」(断定の助動詞「なり」の連用形) + あり(補助動詞)「(い)だ、である」の間に疑問の係助詞「か」が挟みこまれたものである。よって、「にかあり」は「いであるか」と訳せる。本文中では「にかあらん」となっており推量の助動詞「ん(む)」がついているので、「いであろうか」といった訳になる。ちなみに「にかあらん」は「か」と「ん」が係り結びの関係なので、「ん」は連体形となっている。

◎傍線部の和歌を見てみると、最初の「明日ありと思ふ」が俳諧師が千本の家に残したものと一致している。まるで俳諧師の歌を踏まえてつくったものようだ。

★「ここでの「おのれ」は「自分(俳諧師)」の意味。「おのれ」は「①自分・

私②おまえ」の意味があり、どちらかわかりにくいときもあるが、文脈に即して注意して考えればわかる。最初から片方に決めてかからないことが重要だ。

第3段落第1行～第2行「この人、大とあらじ。」

◎千本の歌を見て驚いた人なので、「この人」は俳諧師を指す。

◎「じ」は打消推量の助動詞。俳諧師は、千本が自分の書き残した歌を知らない限り、この和歌を詠むのは不可能だと思っている。では、千本は俳諧師の歌を読んでから、この和歌を書いて俳諧師の家に貼ったのか。

★「すさみ(すさび)」は「気まぐれ・もてあそび」の意。余裕があったら覚えておこう。この意味を知らなくても、和歌を詠んだのが千本であると俳諧師は思ったことが読み取ればよい。

第3段落第2行～第3行「されど、わと思ひて、」

◎「たらん」は完了の助動詞の「たり」に仮定の助動詞の「ん(む)」がついたもの。

◎千本が、自分の家にある俳諧師の歌を見てからこの和歌を詠んで、俳諧師が自分の家に戻る前に俳諧師の家に貼るのは、時間的に難しそうだ。俳諧師は最終的に狐狸の仕業だと考えた。

第3段落第3行～第4行「入りて家の心地しつ。」

◎「そぞろなり」は「①何ということもない②思いがけない③むやみやたらだ」という意味の重要古語。「ここ」では「そぞろ」だけだが、応用して訳語を当てはめてみる。

◎千本は家に来ていないと聞かされた俳諧師は、千本の和歌が貼られていた

のをますます気味悪がって寒気をおぼえているようだ。

第3段落第4行～第5行「外に出づるゝ寝にけり。」

◎「にけり」は完了の助動詞「ぬ」の連用形である。「に」と過去の助動詞「けり」が組み合わさった頻出の形である。「ゝってしまった」と訳すと意味が通ることが多い。

第3段落第5行～第7行「すでに暁のゝ吟じける。」

◎「ける」が連体形なのは、「いくたびか」の疑問の係助詞「か」との間に係り結びが発生しているから。

◎夜明け前に空から人の声がしたら驚くのも無理はない。

第3段落第7行～第9行「その声、千々ふしけり。」

★「にや」は断定の助動詞「なり」の連用形である。「に」と係助詞「や」が組み合わさったものであり、多くの場合は「にやあらむ」「にやありけむ」の形で、「ゝのであろうか」「ゝのであったのだらうか」の意味になる。「にやあらむ」「にやありけむ」は文末にくると、今回のように「あらむ」「やありけむ」が省略されて「にや」だけの形で用いられることもある。

★「きぬ」は「絹」から派生して、「衣服・着物」の意味。覚えておいたほうがよい。

第4段落第1行～第2行「次の日も頭ゝし居たり。」

★「起き出でずあり」の「あり」は上の語の叙述を助ける補助動詞で、「ゝである」「ゝている」といった意味になる。

◎俳諧師が前日探していた千本は、翌日高殿で見つかった。いったいこれは

どういうことだろう。

第4段落第2行～第3行「おどろきてゝかしたり。」

◎「おどろきて引き起こして問ふ」の主語は俳諧師。

◎ここで謎が解ける。千本はずっと高殿の上にあったのだ。それでは空中からした声の正体はやはり……。

第4段落第3行～第5行「約をたがへも理なり。」

◎「にこそあれ」は先ほど出てきた、「に十あり」の間に係助詞の「こそ」が入ったものである。「あれ」と已然形になっているのは「こそ」との係り結びになっているからである。

◎空中で声がすると思っただのは俳諧師。

◎結局、空中の声も千本のものであった。

第4段落第5行～第6行「かつ、千本ゝのぞかし。」

◎「世に」は「世の中には」という意味のほかに「本当に、（打消を伴って）決して」という意味がある。「よに」というようにひらがなでも同じである。文脈に応じて訳し分ける。

◎「ぞかし」は強調の係助詞「ぞ」と念押し終助詞「かし」が組み合わさったもので、「ゝであるなあ」というような感動を込めた念押しの意味を表す。

★俳諧師が狐狸の仕業とした和歌も千本が書いたものであり、俳諧師の歌を踏まえたような内容だったのは偶然であったというのである。そしてそれに対して「面白い」という筆者の感想を添えてこの文章は終わっている。最後に筆者の感想を添えるのは古文でよくあることである。

設問解説

問(一)

解答

《合格答案》

(ア) しばらくして日は暮れた

(イ) 理由もなく寒い感じがした

《満点答案》

(ア) しばらくして日は暮れた

(イ) 理由もなく寒い感じがした

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

(ア)

副詞「とばかり」は「しばらく・少しの間」の意味。覚えておいてほしい単語である。しかしこれを知らなくても、「ばかり」が程度を表す語であるとわかっていれば、月見に誘う手紙を出して、「とばかりありて」日が暮れたことから、この「ばかり」は時間の程度を表していると考えることができ。さらに、手紙の内容が月見の誘いであることから、手紙を出したタイミングと日が暮れたタイミングはあまり離れていないと考えられるので、「しばらく・少しの間」という訳も導き出せる。

「暮れぬ」の「ぬ」は完了の助動詞であるので、あとはそれを訳出すればよい。

(イ)

「そぞろ」は形容動詞「そぞろなり」の語幹だが、江戸時代以降は独立した副詞として用いられるようになった。重要古語「そぞろなり」||「①何ということもない②思いがけない③むやみやたらだ」を覚えていれば「そぞろ」の意味も推測できたはずだ。

「心地しつ」は「気持ち・感じ」などの意を表す名詞「心地」にサ変動詞「す」の連用形と完了の助動詞「つ」の終止形が接続したもので、「感じがした」と訳す。

問(二)

解答

《合格答案》

月見は今日ではなく明日がよいと思うあなたは浅はかであり、月夜も趣が少なく感じられる、という意味。

《満点答案》

十五夜でなくても今日は月が美しいのに、月見は十五日で満月になる明日がよいと思うあなたは浅はかであり、月夜も趣が少なく感じられる、という意味。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 俳句

解説

まず、「明日あり」とは何のことか考える。俳諧師がこの紙を千本の家に貼る前の部分を見ると、俳諧師が千本は家の者たちに「月見は今晚ではなく明日がよい」と言うように教えておいたと思っ怒っている。このことから、「明日あり」とは「月見は明日がよい」ということを指しているとわ

かる。もちろん、「明日ありと思ふ」の主語は千本。

次に「あさき」の意味を考えると、俳諧師は千本が「月見は明日がよい」と思ったことを責めているので、「浅はかな」という訳語が当てはまる。また、「あさき」は「月夜」に係ってもいるので、月夜を形容する表現としてふさわしいものを考えてみると、「趣が少ない」という訳語が当てはまる。この訳語を知らなくても、風景を褒める「趣深い」という言葉や、「浅い」は「深い」の対義語であることから連想できるとよい。しかしここで一つの矛盾が発生する。俳諧師は今日の月がきれいだから千本を呼んだはずなのに「趣が少ない月夜」とはどういうことか。これは、実際に月夜の趣が少なくというより、浅はかな考えにふれて失望し、月夜の趣が少なく感じられてしまう、ということだ。

もう一つの要素として、明日は月が満月になる十五日であることをつけ足せば、『満点答案』になる。俳諧師は千本が明日満月になるという理由で月見を明日に延期しようとしたと勘違いして、満月が一番きれいだろうという短絡的な考えが浅はかだと怒っているのだ。旧暦の十五日に満月になるのは常識として覚えておくべきだろう。

問(三)

解答

《合格答案》

明日満月を見ればよいという怠慢な心はなく、今夜の明るい月を見ています、という意味。

《満点答案》

明日満月を見ればよいという怠慢な心はなく、すがすがしく今夜の美しい月を見ています、という意味。

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 和歌

解説

問(三)も問(二)と同じ要領で解いていくが、問(二)よりも傍線部に補う情報量は少ないので解きやすい。

まず、「明日あり」は問(二)と同じように「月見は明日がよい」と解釈すればよい。「おこたり」は「①怠慢②怠慢による過失③謝罪」などの意味があり、今回の文脈に沿っているのは「怠慢」。

次に「さやけき」の解釈に移るが、これも問(二)と同じように詠み手(今回は千本)の感情と月の両方を一度に表現していると考えられる。「さやけし」には「①清く澄んでいる・さわやかだ②はつきりしている・明るい」の二つの意味がある。それぞれ、「清けし」と「明けし」という漢字をあてる。今回はそのそれぞれを「千本の感情」と「月」を形容するものとして訳出していく。

問(四)

解答

千本が高殿で月を見ながら歌を吟じた声。

難易度 ★★☆☆☆

解説

設問パターン 内容説明(具体化型)

俳諧師は当初、空中から聞こえた人の声を千本のものだと認めつつも、「されど、かく中空に声するは、きはめて狐狸のわれをたぶらかさんとてなすわざにや。または、千本は仙術など学び得たるにや」というように、狐狸が自分をたぶらかしているか、千本が仙術を習得したと思ひ込んで怖がっ

ていた。しかし次の日に千本を高殿の上で見つけたあとに、「かくばかり高きうてなの上にて歌吟じければ、空中に声ありと思ひしも理なり。」という記述がある。ここでの「空中に声ありと思ひし」が傍線部(3)と対応している。したがって、空中から聞こえた声は、千本が月を見るために早くから登っていた高殿の上から歌を吟じた声であるとわかる。これを制限字数内で表現すればよい。

問五

解答

一緒に月を見ようと約束した俳諧師がやって来なくても、月を賞賛する歌を吟詠しながら月見をして、気長に待っていたこと。(57字)

難易度 ★★☆☆☆

解説

設問パターン 内容説明(要約型+理由補填型)

問われているのは筆者が千本について「風流」だと感じる理由になる、千本の言動である。まず傍線部にヒントがないか見てみる。傍線部を訳してみると、「千本はせつかちな人だが、月を愛でて、このように気が長いのも風流だ」となり、はつきりと「月を愛でるところ」と「気が長いところ」が風流だと書かれている。これで解答の大枠は決まった。あとは、このような性格が読み取れる千本の言動を探せばよい。まず、「月を愛でるところ」が表れた言動としては、歌を吟詠しながら月見をしたことが挙げられる。さらに、この時千本が詠んだ歌は月を愛でる内容であったことから、千本は月を好んでいたことがわかる。もう一方の「気が長いところ」は何といっても、やって来なかった俳諧師を一晚高殿の上で待っていたことに表れているだろう。これらを字数内でまとめる。

本文解説

現代語訳

ある年の八月半ばに、丸太を立てて、縄で結んで、たいそう高い高殿を仮につくって、千本と二人で、これに登って月を見ようと約束しておいた。こうして十四日になったとき、例の俳諧師の方から手紙を書いて、「今日は空も晴れ渡った。きつと今夜は月も美しいだろうと思われる。早くいらっしやうって、待宵(＝十五夜の前日である十四日の夜)の月をご覧になってください」と言ってくれた。しばらくして日は暮れた。この俳諧師は千本が遅いのを待ちわびて、迎えに来たが、千本は家にいない。(千本の家の)人々に尋ねると、「旦那様は先ほどどこかへお出かけなされた。月見は明日の夜がよい。今夜に限ることか(いや、今夜に限ることではない)」と、人々が言うのを聞いて、この俳諧師は心の中で怒り、「それでは、千本は、家の者たちに、このように教えて言っておいて、どこかへ出かけていったのだろう。(千本が)約束を破ったことは恨めしいことだ」と言いながら立ち去ったが、すぐにまたやって来て一枚の紙に書いたものを門の戸に貼って帰った。(千本の家の)人々が出て読んでみると、

「明日ありと……(月見は明日がよいと思うあなたは浅はかであり、月夜も趣が少なく感じられるなあ)」と書いてある。

こうして、例の俳諧師が家に帰ったところ、自分の家の門にもまた一枚の紙が貼ってある。「何であろうか」と読んでみると、

「明日ありと……(明日満月を見ればよいという怠慢な心はなく、すがすがしい今夜の明るい月を見えています)」

この人(＝俳諧師)は大いに驚いて、「これは千本が気ままに書いたもの

だ。私が千本の家に書いておいた句を（千本が）知らないならば、まさかこの歌が詠み出されることはあるまい。けれども、私の句を見て、それから詠み出したのならば、私より先に来てここに書いておくことは難しいだろう。これは完全に狐や狸が行ったことにちがいない」と思って、入って家の者たちに尋ねると、「千本さんはまったくお見えになっていない」と答える。ますます不思議になって、やたらと理由もなく寒い感じがした。外に出るのも恐ろしくなって、そのまま寝床に入って寝てしまった。もう夜明け前になって、空中に人の声がある。例の俳諧師は驚いて、頭を持ち上げて、これを聞く、

「枝ぶりの……（枝ぶりがなくてどちらとも趣深いなあ。月の桂（＝月にあるとされる木）と野原の鈴虫は）」

という歌を何回か吟詠した。その声は千本と少しも違わない。「しかし、このように空中で声があるのは、きっと狐や狸が私をたぶらかそうとして行うことであろうか。または、千本が仙術を習得したのであるか」と、ますます恐ろしくなって、着物をかぶって横になった。

次の日も頭が痛み寝込んで気分がよくないので、昼過ぎまで起き出さなかったが、だんだん気分がよくなって、外に出て、何の気もなく、あの仮につくった高殿の上に登ったところ千本はここに横になっている。驚いて起こして尋ねると、千本が言う。「私はあなたと固く約束していることであるので、昨晩は早くからここに登って、月を見て一晩明かした。約束を破ってここにお登りにならないのは本当に不満に思うことである」と言った。

これほど高い高殿の上で歌を吟詠したので、空中で声がすると思ったのも当然である。また、千本はせっかちな人であるが、月に心を惹かれて、このように気長だったのも風流である。また、夜になってすぐ詠んだ「明日ありと思ふ」の歌は、よくわからないが偶然一致したことであるということ、世

の中には面白いことがあるものだなあ。

用語解説

いと ①非常に・たいそう②（打消の語を伴って）あまりくはない

ちぎる【契る】「他ラ四」 ①約束する②愛を誓う・結婚する

せうそこす【消息す】「自サ変」 ①手紙を書く②取次を頼む③訪問する

おぼゆ【覚ゆ】「自ヤ下二」 ①自然と思う②思い出される③似ている

おこす【遣す・致す】「他サ下二」 よこす・こちらへ送ってくる

・平仮名で記されている場合、「起こす」との混同に注意。

・鎌倉時代頃からは四段活用でも用いられるようになった。

とばかり しばらく・少しの間

いづこ【何処】 どこ・どちら

たがふ【違ふ】「他ハ下二」 ①破る・背く②間違える③方違えをする

やがて そのまま・すぐに

おこたり【怠り】 ①怠慢②過ち③謝罪

わざ ①法要②加持祈祷③こと

さらに【更に】 改めて、さらに、（打消の表現を伴って）決して（くはない）、

全然（くはない）

あやし【怪し・奇し】 不思議だ・変だ

そぞろなり【漫ろなり】 ①何という理由もない②無関係だ③むやみやたら

だ

ここち【心地】 ①気分②体調・病氣

あかつき【暁】 夜明け前のまだ薄暗いころ

おもしろし【面白し】 ①趣深い②面白い

やうやう だんだん

とく【疾く】 ①すぐに②すでに

ことわり【理】 ①道理②理由

をかし ①趣がある②美しい③素晴らしい④おかしい

・「をかし」は知的・感覚的に感じた美しさについて述べるもの。動的なニュアンスがある。「あはれ」はしみじみと共感する感動を述べる。静的なニュアンスがある。

(山崎恭子、田村進也、築島愛美)

2015 年度 東北大学 前期 国語

四 漢文（清代の隨筆）

難易度	★★★★☆
所要時間	25分
出典	向瑤『羅麻伝』からの出題。向瑤は清代初期の学者。文集『向愴齋先生集』の第一巻の「羅麻伝」からの出題。
傾向と対策	<p>字数は299字で、例年に比べて長め。文章の難易度は標準。細かい文法事項も多いが、対の表現や逆接の接続詞などに注意すれば、論理展開や文意の把握は容易だったと思われる。構成は、文章前半で具体的事例を取り上げ、文章後半で作者の意見を述べる、という典型的なもの。段落分けがされていないので、自分で意味のまとまりをつかみながら読むことが必要だった。</p> <p>問(二)・問(三)では漢字や句形の知識を文脈に照らして解釈することに加え、傍線部前後との整合性がとれた解答を作成する必要がある。傍線部前後にも気を配る習慣をつけよう。問(四)では答えるべきポイントが二点あること、問(五)では「羅麻」に言及する必要があること、をそれぞれ見抜きたい。問題指示文をしっかり読む習慣をつけよう。また、字数制</p>

傾向と対策

限が厳しいため、少ない字数でポイントを盛り込む練習を積もう。

問題を解く順番としては、まず通読する中で知識問題の問(一)（や問(二)の一部）などを解き、通読して文意を把握したうえで残りの問題を解く、という方法が効率的だと思われる。時間配分の目安は、通読に15分弱、残りの問題を解くのに10分弱。

《この解説の使い方》

本文読解

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワランク上の読み(☆)、脳内で把握された内容(▼)を適宜載せてある。

設問解説

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

本文解説

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名（作品名を書き下す場合を除く）のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

解答

問(一) (1) あによく (2) ついに

問(二) (3) そうよりろうにいたるまで

「そうよりろうにいたり・そうよりろうにいたるも」

(4) これをちにほる

(5) うるとえざるとをろんずる(こと)なく(して)

問(三) (a) 若いときは金属の鑄造を生業としていた

(b) 一日中力を尽くして働いても

問(四) 財欲に溺れ、生業を捨て、本来天や人に求めるべき財を、地を掘って

得ようとした点。(39字)

問(五) 世間の人々が、富や地位を得ようと有力者に熱心にこびるといふ、羅

麻以上に卑俗な行為をしながら、それを自覚していないから。(59字)

本文読解

通読

三江に羅麻なる者有り。

◎「三江」は、(注)より地名。

▼三江に羅麻という者がいた。

◎登場人物の紹介から始まったな。ほかにも状況説明がなされるかもしれないな。

其の何の名たるかを知らず。

◎「其」は、指示語で「羅麻」を指すな。

▼羅麻の名前はわからない。

里人其の面の麻あはたあるに因りて、羅麻と呼ぶ。

◎「其」は、指示語で「羅麻」を指すな。「面」は、「顔」の意味だな。

▼里の人々は彼の顔に「麻」があることから、彼を羅麻と呼んだ。

城の東門に居り、^(a)少以冶鑄^レ為^レ業。◎「少」の読みは何かな。「以^レ為^レ」の構文があるな。「冶鑄」は、金属の

鑄造のようなものだろう。「業」は、「仕事」の意味だな。

☆「城」は、「町」の意味だな。

▼羅麻は、町の東門のあたりに住んでいて、鑄造の仕事で生計を立てていた。

長ずるに及び、金を掘るを以て富を致す者有るを聞き、嘆きて曰く、

◎一文前の「少」は、「長」との対比で年齢のことを表しているんだな。

「以」は、手段を表しているな。

▼年をとって、金を掘ることで富を築いている者がいることを聞き、嘆いて言ったことには、

◎金を掘ることで富を築いている人のことを聞いて、羅麻はどんなことを言ったのだろう。

「治の技たる、賤にして且つ勞、^(b)窮日之力^レ、得る所は百錢に過ぎざるのみ。

◎傍線部は「動詞+目的語」の関係になっているっほいけど、よくわからないから後回しにしよう。

☆「耳」は、断定の意味だな。

▼鑄造の仕事は、身分が低くかつ大変で、得られるものはわずかなお金にすぎないのだ。

◎ 鑄造の仕事は、もうからないらしい。

⁽¹⁾ 豈能鑑を蔵する」と巨万、郷里の小児に誇耀せんや」と。

◎ 「豈」は、文末が「んや」となっていることから反語だとわかるな。「能」

は、可能を表す文字だな。「鑑」は、(注)より「まとまった額の銭」。

▼ どうしてまとまった額の銭をたくさん貯蔵して、故郷のやつらに高らかに誇ることができようか、いやできない。」

◎ 鑄造の仕事は、もうからないから大金は稼げないらしい。

⁽²⁾ 遂其の業を棄て、日び金を掘るを以て事と為す。

◎ 「遂」は、「つひに」と読む漢字として頻出だな。「以て為」の構文があるな。「事」は、「仕事」の意味だな。

▼ そのまま鑄造の仕事を辞め、毎日金を掘ることを仕事とした。

然れども⁽³⁾ 自壯至老、竟に一金をも得ずして以て死す。

◎ 「自」は返読文字かな。「壯」と「老」は対比かな。傍線部の訳はよくわからないから後回しにしよう。「竟」は、「結局」の意味だな。「一」と否定だから、全否定だな。

▼ しかし、結局まったく金を得ることなく死んでしまった。

◎ 冒頭から続いていた羅麻に関する話はここで一区切りかな。この例から作者は何を伝えたいのだろう。

聞く者憫れみて之を笑はざる莫し。

◎ 「之」は、指示語で「羅麻」を指すな。「莫」と「不」の二重否定だから肯定の意味だな。

▼ 聞く者で、憐れんで羅麻を嘲笑しない者はいなかった。

◎ 人々はなぜ羅麻を憐れんだり、嘲笑したりしたのだろう。

之を笑ふ者は何ぞや、其の計に拙きを笑ふなり。

◎ 「之」「其」は、指示語で「羅麻」を指すな。疑問文の形だけど、誰かに問いかけているわけではなく自問自答しているな。「計」は、「計画性」の意味かな。

▼ 羅麻を嘲笑する者はなぜ嘲笑するのかというと、羅麻が計画性に乏しかったことを嘲笑するのだ。

◎ 羅麻を笑うのは計画性に乏しかったかららしい。

之を憫れむ者は何ぞや、其の財に溺るるを憫れむなり。

◎ 前の一文と対になっているな。この文でも「之」「其」は、指示語で「羅麻」を指すな。この文も、疑問文の形だけど誰かに問いかけているわけではなく自問自答しているな。

▼ 羅麻を憐れむ者はなぜ憐れむのかというと、羅麻が財欲に溺れていたことを憐れむのだ。

◎ 羅麻を憐れむのは財欲に溺れていたかららしい。

嗟乎、富貴の權、天実⁽⁴⁾に之を主⁽⁵⁾り、人実⁽⁶⁾に之を操⁽⁷⁾る。

◎ 「嗟乎」は、文頭に置かれ感嘆の意味を表す感嘆詞。二つの「之」はどちらも指示語で、「富貴之權」を指すな。

▼ ああ、富や地位の権限は、天が実際につかさどり、人が実際に行使するものである。

◎ 「富貴之權」についての説明がされているな。

麻既に天に得ず、人に求めずして、**願だ切切として**⁽⁴⁾**掘之於地。**

◎「之」は直後の漢字が置き字の「於」だから「の」ではなく、指示語の「これ」で「富貴之権」を指すな。

☆「既」は、「終始・依然として」という意味だろう。「切切」の「切」は、「切実」の「切」だな。「切切として」は、一生懸命で必死な様子を表す表現だろう。

▼羅麻は終始天に与えられず、人に求めずに、ただ必死になって地を掘った。

(ア) **其の濁るる」と誠を憐れむべくして、其の拙き」と誠を笑ふべし。**

◎「其」は、指示語で「羅麻」を指すな。

▼彼が(財欲に)溺れたことは本当に憐れむべきで、彼が(計画性に)乏しかったことは本当に嘲笑するべきだ。

◎羅麻の計画性の乏しさや彼が財欲に溺れていたことは、**憫笑するに値するらしい。**三文前・四文前と同じ内容を繰り返しているな。

然れども吾れ謂へらく

▼しかし私が思うことには

◎逆接の接続詞の「然」があるし、「吾謂」以下で作者の意見が続くから、これ以降の部分は大事そうだな。

世の羅麻を笑ひ羅麻を憫れむ者も、正に未だ必ずしも羅麻に**非ざるにあらざるなりと。**

◎「未必」で否定語が副詞より先だから、部分否定だな。「未」と「非」の二重否定だから肯定の意味だな。

☆「未」はここでは、一般的な「まだくしない」という意味だとすると意味が通らないから、単純な否定の意味だな。

▼世間の、羅麻を嘲笑し憐れむ人々も、間違いなく、必ずしも羅麻のようではないことはない。

◎世間の、羅麻を憫笑する人も、羅麻と違つとは限らないらしい。

熙熙として来るは、何ぞ計に拙き者に非ざること莫きや。**據據として往くは、何ぞ財に濁るる者に非ざること莫きや。**

◎この二文は対になっているな。「熙熙攘攘」は(注)より「衆人が利益を求めて騒がしく往来する様子」。「莫」と「非」の二重否定だから肯定の意味だな。

▼利益を求めて騒がしくやって来る人間は、どうして計画性に乏しい人間でないことがないだろうか。利益を求めて騒がしく出かけていく人間は、どうして財欲にとらわれた人間でないことがないだろうか。

◎世間の人々も、羅麻と同じように計画性に乏しく、財欲に溺れているらしい。

而るに独り麻に於いて之を笑ひ之を憫れむのみ。

◎逆接の接続詞の「而」があるから注意しよう。「之」は、指示語で「羅麻」を指すな。「独りノミ」は、限定の句形だな。

▼しかし、ただ羅麻を嘲笑し憐れむだけだ。

◎世間の人々は羅麻を憫笑するだけで、そのこと(＝ほかの人々も羅麻と同じように計画性に乏しかったり、財欲に溺れていたりするかもしれないこと)に気づいていないらしい。

其れ亦た不公の甚し。

▼それは、不公平であること甚だしい。

且つ富を地に求むるは、手を挙ぐるの勞に過ぎざるのみ。

◎「且」で内容が添加されているな。

☆「耳」は、断定の意味だな。

▼しかも、富を地中に求めることは、手を動かす労力を伴うだけだ。

得れば則ち加ふる所有るなり。得ざるも亦た損する所無きなり。

◎この二文は対になっているな。「レバく則」で条件を表しているな。

▼(富を) 得れば、新たに手に入るものがある。(富を) 得なくても、失うものはない。

◎富を地に求めることのメリットが挙げられているな。

而るに富を人に求むれば、則ち趨超囁囁の態、必ず至る所有りて、

◎「レバく則」で条件を表しているな。「趨超囁囁」は、(注)より「有力

者」の前で、立ちすくみ言いよどむ様子」。

▼しかし、富を人に求めれば、有力者との面会に際し、有力者の前で、立ちすくみ言いよどむ態度が、必ずとることになり、

◎逆接の接続詞「而」があるから注意しよう。富を人に求めることのデメリットが挙げられているな。

痕を吮ひ痔を舐むるの事、辞せざる所有らん。

◎「吮痕舐痔」は、(注)より「へつらうことに熱心な態度のたとえ」。「不」

は返読文字だな。

▼熱心にへつらう事態は、避けられないものであろう。

◎直前の部分に引き続き、富を人に求めることのデメリットが挙げられているな。

⑤ 無論得与不得、卑汚たること亦た已だ極まる。

◎「与」は、前後が「得」と「不得」で対になっているから並列の意味っぽいけど、傍線部の訳はよくわからないから後回しにしよう。

▼卑しく下賤であることは、非常にこの上ない。

◎作者は、世間の人々は羅麻以上に卑しく下賤であると考えているらしい。

⑥ 曠く天下を觀るに、情むに勝ふべけんや。

◎文末が「ンヤ」であることから反語だとわかるな。

▼広く世間を概観すると、嘆きを堪えることができようか、いやできない。

設問解説

問(一)

解答 (1) あによく (2) ついに

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 漢字の読み

解説

知っていることが一番だが、知らなかった場合は熟語を想像するなどして連想しよう。

(1)

「豈」は反語・詠嘆・推量の三つの構文でよく使われるが、いずれの構文

においても読み方は「あ二」である。ここでは、傍線後の文末が、「誇耀せんやと。」のように「未然形十ん十や」となっていることから、反語の意味であることがわかる。

「能」は可能を表し、肯定なら「よく」と読み、否定なら「不能」と書いて「あたはず」と読む。ここでは、肯定なので「よく」と読む。意味は「どつしてゝすることができようか、いやできない」となる。

(2)

「遂」は「つひ二」と読み、「そのまま・とうとう」という意味である。「遂行」という熟語を想像するのもよい。同じく「つひ二」と読む漢字として、5行目の「竟」や「卒」「終」がある。

これらの漢字には細かい意味の違いがあり、「遂」が「そのまま・とうとう」という意味なのに対し、「竟」「卒」「終」は「結局 (finally・after all)」という意味である。

なお、設問には「現代仮名づかいでよい」とあるため、解答は「ついに」としてよい。

問(一)

解答 (3) そうよりろうにいたるまで

「そつよりろうにいたり・そつよりろうにいたるも」

(4) これをちにほる

(5) うるとえざるをろんずる(二と)なく(して)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン ひらがなの書き下し

解説

各問が問おうとしている句形・助字のポイントを意識して解答を作成しよう。傍線部前後にも目を向け、解答が傍線部前後の内容と合致するものになるようにしよう。

(3)

「自」のおもな訓読法は以下のとおり。①副詞「おのづから」「みづから」、②起点の返読文字「より」。ここでは、動詞「至」(意味は「ゝになる」)に注目して、②の起点の返読文字と解釈する。

「壮」「老」は、対の関係として年齢のこゝろを表している。「壮年」「老齢」などの熟語を想像するとよい。

「至」は、続く「老」を目的語とする動詞として解釈する。意味は「ゝになる」。

最後に、傍線部後との整合性を考えて解答を結ぶが、ここでは、解答のよくな結び方に加え、順接や逆接で結んでもよい。

返り点のつけ方は「自_レ壯_ニ至_ル老_ニ」、意味は「壮年期から老齢期に至るまで」「至り・至ったけれど」となる。

(4)

「掘」は、「この文で」「而」のあとに動詞として使われていそうな漢字がこれ以外にないことと、これ以前の文中に名詞などとしての利用がないこととの二点から、動詞として考える。

次に、「掘」の目的語を探すと、「之」が候補として挙がる。「之」のおもな訓読法は以下のとおり。①指示語「これ」「これ」。しかし、②「の」と解釈すると、続く置き字の「於」とつながらなくなるので、「之」は指示語の「これ」と訓読し、「掘」の目的語として解釈し「ヲ」を送る。ここでは、

「これ」の指示する内容は「富貴之権」である。

「於」は置き字で「場所・時間・対象」(一)「起点」(ヨリ)「比較」(ヨリモ)を示す前置詞。「二」では、「金を求めて地を掘った」という文脈から、「場所」の意味として解釈し、続く「地」に「二」を送って訓読する。

以上のように考えると、「動詞十目的語十置き字十場所」という典型的な漢文の文型と解釈できる。ちなみに、この典型的な文型は、11行目「求富於地」、12行目「求富於人」などでも使われている。

返り点のつけ方は「掘_レ之於地_二」、意味は「これ(＝富貴之権)を求めて地を掘った」となる。

(5)

「無」は返読文字で、下に続く名詞・名詞句を否定・禁止する。よって「論」以下が名詞・名詞句になるように訓読する。

「論」は、単体で名詞になることも、動詞として「ろんズ」と読むこともできる。しかし、名詞として解釈すると、何に関する論なのか唐突でわからないうえ、続く「得与不得」とつながらない。そこで、動詞として解釈し「得与不得」がその目的語であると解釈する。

「与」のおもな訓読法は以下のとおり。①動詞「あたフ」、②並列の返読文字「と」、「③選択の構文」よりハ。ここでは、「得」と「不得」の対の関係に注目して、②の並列の返読文字と解釈する。

「得」「不得」は、どちらも名詞として訓読する。動詞「得」は活用が「え、え、う、うる、うれ、えよ」であることに注意して、「得」は「うる」、「不得」は「えざる」と読む。

よって「得与不得」は「うるとえざる」と訓読することになる。これに、「論」の目的語とするために「を」を送ると「うるとえざるとをろんズ」と

なり、さらに「無」に続けられるよう名詞句化するため、「こと」を送るか連体形にする。

最後に、「無」を、傍線部後に文章が続いていることに注目して、連用形か「連用形十して」の形で訓読する。

返り点のつけ方は「無_レ論_二得与_レ不得_一」、意味は「得ると得ないとを論することなく」となる。

問(三)

解答 (a) 若いときは金属の鑄造を生業としていた

(b) 一日中力を尽くして働いても

難易度 ★★★★★

設問パターン 現代語訳

解説

各問が問おうとしている漢字・句形・助字のポイントを意識して解答を作成しよう。傍線部だけでは解釈できないときは、前後の文脈から推測して解答の大枠をつかもう。

(a)

「少」は、「わかシ」と訓読する。傍線部の前後を確認すると、傍線後に「及長(＝年をとり)」とある。「少」は漢文では、年齢に関する文脈で「わかシ」と読むことがあり、問題の傍線部はそれに該当する。「少年」という熟語を想像するとわかりやすい。

「以」「為」は、「以_テA_ヲ為_スB_ト」の構文の一部で、この構文は「AをBにする、AをBだと思ふ(みなす)」という意味。「A」が省略された「以為_レB」という形や「以」が省略された「A為_レB」という形もある。

Aにあたる「冶鑄」については、「冶」「鑄」のどちらも、「金属の鑄造」という意味。「鍛冶」「鑄造」などの熟語から連想したい。

Bにあたる「業」は「(生計を立てるための)仕事」という意味。「生業」などの熟語から連想したい。

(b)

語順、返り点のつき方から、「窮」を動詞、「日之力」を目的語とする典型的な「動詞+目的語」型の文構造だとわかる。

「窮」は「きはム」と読むが、それがわからなくても「窮屈」「困窮」などの熟語から「尽くす・出し切る」というニュアンスを連想したい。

「日之力」は「一日の力」。

最後に、「一日全力で働く」という内容の傍線部の直後に、「得られるものは僅かなお金にすぎない」という内容が続くことに注意して、解答を逆接で結び前後の内容と合致させる。

問(四)

解答 財欲に溺れ、生業を捨て、本来天や人に求めるべき財を、地を掘って

得ようとした点。(39字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

問題の指示に注意し、本文の適切な箇所をまとめよう。

まず問題の指示を把握しよう。指示文が「溺」「拙」を対等に扱い、本文中でも終始「溺」「拙」の二つが対として扱われていたことから、解答では両者に言及することが必要であるとわかる。また、解答文末を「く点」と

結ぶ必要もある。

さらに、傍線部前後に目を向けると、傍線直後に、逆接の「然」で話題転換がなされていることがわかる。よって傍線部以前をまとめて解答を作成すればいいとわかる。

以上に注意し、羅麻の「溺」「拙」な点を考える。

「溺」は、6行目に「溺於財」とあるように、羅麻が財欲に溺れていたことを示す。作者はこのことを「憫^{あわ}れむべきだと述べている。

「拙」は、5行目に「拙於計」とあるように、羅麻が計画性に乏しかったことを示す。計画性に乏しかったから、生業を捨て、6行目「富貴之権」以下でいわれているように本来天や人に求めるべき富を、地を掘ることで得ようとしたのである。作者はこのことを「笑」うべきだと述べている。

以上をまとめると解答となる。

問(五)

解答 世間の人々が、富や地位を得ようと有力者に熱心にこびるといふ、羅

麻以上に卑俗な行為をしながら、それを自覚していないから。(59字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 理由説明

解説

問題の指示に注意し、本文の適切な箇所をまとめよう。

まず問題の指示を把握しよう。指示文中の「このような感慨」を明らかにするために傍線部を解釈する必要があることがわかる。解答文末を「くから」と結ぶ必要もある。

では、傍線部を解釈する。傍線部を訓点にもとづいて書き下すと「曠く天下を觀るに、悼むに勝ふべけんや」となる。「可勝悼(悼むに勝ふべけんや)」

の反語に注意して、意味は「悼まないでいられようか、いやいられない」。

次に、「悼」む対象を考える。これは傍線部以前をまとめていくことになる。(注)を参照して傍線部直前の五行ほどをまとめると、作者が「悼」んでいるのは、「世間の人々が、富や地位を得ようと有力者に熱心にこびている」という「卑汚」な状況、である。「卑汚」は「卑俗」「低劣」などの熟語に置き換えられるとよいが、難しいので、置き換えようとする姿勢が採点者に伝われば十分だろう。

さらに、「本文の内容に即し」という指示から、本文前半で取り上げられていた羅麻についても言及したほうがよいだろう。作者は、13行目で世間の人々の行為を「卑汚亦已極」と述べているように、世間の人々の行為が最も卑俗である、すなわち、羅麻以上に卑俗である、と考えている。にもかかわらず、世間の人々が自分の卑俗さに気づかず羅麻を憫笑しているという状況を、作者は「悼」んでいるのである。

本文解説

第1部 羅麻の生涯 (5行目)「以死。」

書き下し

三江に羅麻なる者有り。其の何の名たるかを知らず。里人其の面の麻あるに因りて、羅麻と呼ぶ。城の東門に居り、少きときは冶鑄を以て業と為す。長ずるに及び、金を掘るを以て富を致す者有るを聞き、嘆きて曰く、「治の技たる、賤にして且つ勞、日の力を窮むるも、得る所は百錢に過ぎざるのみ。豈に能く鐵を蔵すること巨万、郷里の小児に誇耀せんや」と。遂に其の業を棄て、日び金を掘るを以て事と為す。然れども壯より老に至るまで、竟に一金をも得ずして以て死す。

現代語訳

三江に羅麻という者がいた。彼がどのような名前であったのかはわからない。里の人々は彼の顔に麻(天然痘の痕)があることを理由に、(彼を)羅麻と呼んだ。(羅麻は)町の東門のあたりに住んでいて、若いときは鑄造を生業としていた。年をとり、金を掘ることで富を築いている者がいることを聞いて、嘆き、「鑄造の仕事は、身分が低く、なおかつ大変で、一日中全力で働いても、得られるものはわずかなお金に過ぎないのだ。どうして、またまった額の銭の束をたくさん貯蓄して、故郷のやつらに高らかに誇ることができようか、いやできない。」と言った。(羅麻は)そのまま自身の生業である鑄造の仕事を辞め、毎日金を掘ることを仕事とした。しかし、壮年期から老齢期に至るまで、結局まったたく金を得ることなく死んでしまった。

第2部 羅麻に対する世間の人々の反応

(5行目)「聞者」8行目「可笑矣。」

書き下し

聞く者憫れみて之を笑はざる莫し。之を笑ふ者は何ぞや、其の計に拙きを笑ふなり。之を憫れむ者は何ぞや、其の財に溺るるを憫れむなり。嗟乎、富貴の権、天実之を主り、人実之を操る。麻既に天に得ず、人に求めずして、顧だ切切として之を地に掘る。其の溺るること誠に憫れむべくして、其の拙きこと誠に笑ふべし。

現代語訳

この話を聞く者で、憐れんで羅麻を嘲笑しない者はいなかった。彼を嘲笑する者はなぜ嘲笑するのかというと、彼が計画性に乏しかったことを嘲笑するのだ。彼を憐れむ者はなぜ憐れむのかというと、彼が財欲に溺れていたことを憐れむのだ。ああ、富や地位の権限は、天が実際につかさどり、人が実

際に行使するものである。羅麻は終始天に（それを）与えられず、人に（それを）求めずに、ただ必死になって地を掘った（地を掘ることによってそれを得ようとした）。彼が（財欲に）溺れたことは本当に憐れむべきで、彼が（計画性に）乏しかったことは本当に嘲笑するべきだ。

第3部 世間の人々に対する作者の反応（8行目「然吾謂」〜）

書き下し

然れども吾れ謂へらく世の羅麻を笑ひ羅麻を憫れむ者も、正に未だ必ずしも羅麻に非ざるにあらざるなりと。熙熙として来るは、何ぞ計に拙き者に非ざること莫きや。攘攘として往くは、何ぞ財に溺るる者に非ざること莫きや。而るに独り麻に於いて之を笑ひ之を憫れむのみ。其れ亦た不公の甚し。且つ富を地に求むるは、手を挙ぐるの勞に過ぎざるのみ。得れば則ち加ふる所有るなり。得ざるも亦た損する所無きなり。而るに富を人に求むれば、則ち趙趙嘔嘔の態、必ず至る所有りて、疽を吮ひ痔を舐むるの事、辞せざる所有らん。得ると得ざるを論ずること無く（して）、卑汚たること亦た已だ極まる。曠く天下を觀るに、悼むに勝ふべけんや。

現代語訳

しかし私は、世間の、羅麻を嘲笑し憐れむ人々も、間違ひなく、必ずしも羅麻のようでないことはない、と思う。利益を求めて騒がしくやって来る人間は、どうして計画性に乏しい人間でないことがないだろうか。利益を求めて騒がしく出かけていく人間は、どうして財欲にとらわれた人間でないことがないだろうか。しかし（実際は）、（世間の人々は）ただ羅麻を嘲笑し憐れむだけだ。それは、不公平であること甚だしい。しかも、富を求めて地中を探すことは、手を動かす労力を伴うだけだ。（富を）得れば、新たに手に入

るものがある。（富を）得なくても、失うものはない。しかし、富を人から得ようとすれば、有力者との面会に際し、進もうとして立ちすくみ言おうとして言いよどむ態度を、必ずとることになり、熱心にへつらう事態は、避けられないものであろう。（富を）得る・得ないにかかわらず、卑しく下賤であることは、非常にこの上ない。広く世間を概観すると、嘆きを我慢することができようか、いやできない。

要旨

羅麻はより財を得ようと毎日金を掘ったが、得られずに死んだ。世間の人々は彼を嘲笑したが、彼らも財欲に溺れていて計画性がない点で羅麻と同様である。その上富や権力を他者に求めており、より卑俗だ。（94字）

（松野貴大、竹本有輝、若杉柊志）